

助成年度：2019 年度

[所属] 宇都宮大学 農学部

[役職] 准教授

[氏名] 守山 拓弥

[課題]

伝統的なカイボリがため池管理の持続性におよぼす影響の解明

[内容]

本研究では、ため池の魚類の現状を調べるとともに、人々の農作業やカイボリ等の日々の作業により、ため池の魚類がどのような状況となっているかについて、明らかにするための調査研究を行った。

第一に、全国および栃木県におけるカイボリ漁の実態をアンケート調査により明らかにした。アンケートでは、カイボリが盛んであった時期（S30 年代頃）のカイボリの実態を明らかにすることを目指した。また、カイボリ漁の衰退および再開の時期や要因という変遷を明らかにした。調査結果をまとめると次のようになる。カイボリの実態：ため池では非灌漑期となる 9 月から 12 月に集中して実施されていた。灌漑期はため池の水を用いるため水を抜かず、1 月からは水を溜める必要があるため、この間に集中したと考えられる。以上から、カイボリ漁は水管理を伴う農作業と関連し行われていることがわかった。カイボリ漁の変遷：ため池では中断した年代は S50 年代が最も多く、高齢化が中断理由として顕著であった。S30 年代の主な実施目的は食糧確保（計 26 地区 35%）であるが、再開理由は生き物調査（14 地区 42%）、外来種駆除（11 地区 33%）、維持管理（10 地区 30%）、以下、生き物調査等であった。以上から、カイボリ漁の目的が食糧確保から生き物調査等へと変化していることがわかった。

第二に、長野県東信地方の御牧ヶ原台地において、ため池に生息する魚類相の解明とその生息要因の検討を行った。調査には、近年急速に活用が広がっている環境 DNA 分析を用いた。さらに、調査にはプーリング採水法という手法を考案し、膨大な数におよぶため池群における絶滅危惧種の探索方法を確立した。この手法により、長野県内で生息記録のないキタノアカヒレタビラの生息地を 20 箇所発見し、日本魚類学会で発表した。また、調査結果は新聞報道された。